

なぜ、猫の殺処分数は減らないのか？

平成23年度の調査では、猫の殺処分数は13万1136頭と報告されています。犬の処分数が、現在4万3606頭にまで減っていることに比べると、猫の方が問題が根深く深刻であることがわかります。なぜ、猫の殺処分数が減らないのか、適正譲渡が進みにくいのか、猫を取り巻く現状と問題について、整理してみましょう。



■ 問題の整理

犬の殺処分数が着実に減っているのに対して、猫についての成果がなかなか上がらない理由として、犬と比較して以下のようなことが挙げられます。

① 猫に対する人々の、飼育責任の意識が低い

猫の飼育は昔から「ねずみをとってもらおう」という目的もあり、「猫は自由にさせるもの」という意識が日本人の中に根強くあるため、屋内の管理や繁殖制限が望ましいという飼い主責任の意識が十分とは言えません。そのため、外への出入りが自由な状態で飼われている猫や飼い主がいない猫による、糞尿やいたずらなどが、苦情の原因になっています。

② 繁殖生理が違う

犬と異なり、猫は発情の周期が頻繁で、繁殖能力が高い動物です。繁殖制限を行っていない場合、繁殖を繰り返し、一頭のメス猫が1年で20頭、2年で80頭以上に増えるともいわれています。

	犬の場合	猫の場合
オスの性成熟	6～9ヶ月	9～12ヶ月
メスの性成熟	6～9ヶ月	4～12ヶ月 ※早い個体は4ヶ月齢で妊娠が可能
性周期	年に1～2回	年に2～4回
排卵	自然排卵	交尾排卵 ※交尾すれば非常に高い確率で妊娠す

■ 以上のような要因から

- ・子猫の引取り数が減少しない！

平成23年度の調査では、引き取られた猫のうちの73%が子猫でした。飼い猫が生んだ子猫の遺棄も後を絶ちません。

・猫に関する苦情が多い！

外飼いの猫、飼い主のいない猫による、糞尿被害や騒音、いたずら、侵入など環境悪化の苦情や、「適切な管理がされないままえさやりをしているから猫が増えて困る」「猫が捨てられている」など、さまざまな苦情が行政に寄せられます。

・猫の譲渡希望者が少ない！

近所で生まれた猫を譲り受ける等の機会が多く、自治体から猫を譲り受けるまでにいたりません。

・成猫まで、手が回らない！

子猫の収容数が多く、また希望者が多いため、成猫の譲渡が進みづらい状況です。

■ 自治体の事例

こうした状況の中で、殺処分数を減らし適正譲渡を進めるため、それぞれの自治体で、さまざまな工夫や努力がなされています。

譲渡前の不妊去勢手術を獣医師会と連携して行っている自治体、団体譲渡など民間と連携して譲渡率をあげている自治体、引取り頭数を減らすために「地域猫活動」や、不妊去勢手術の助成金制度、適正飼養の指導などに力を入れている自治体などさまざまです。

この冊子では、そうした取り組みを多くご紹介しています。

猫の適正飼養・譲渡に関わるアンケート調査の結果（一部）

実施：平成25年1月

対象：47都道府県および政令指定都市をあわせ108自治体

回答数：93自治体

猫の譲渡を行っていますか	
実施している	87
実施していない	6

譲渡対象とする猫について	
子猫のみ	4
子猫・成猫とも	78
その他（県への委託など）	7

譲渡する際の不妊去勢手術について（回答数73自治体）	
自治体の動物愛護センターなどで譲渡前不妊去勢手術を行っている （全頭でない場合を含む）	24
→上記について 譲渡前不妊去勢手術についての費用は自治体が負担	19
→上記について 子猫に対しても譲渡前不妊去勢手術を行っている	9
地方獣医師会の協力で、譲渡後の不妊去勢手術を低額で進めている	4